

中世後期における地域的流通の発達と守護領国

——大内氏領国を例にして——

貝 英 幸

はじめに

中世後期は莊園公領制が崩壊への途を歩む一方、全国各地において守護・国人など在地勢力の伸長による地方分権化が進展する時期である。この傾向は流通においてもなんら例外ではなく、中央都市との流通とは直接には結びつかない地域的流通が発展する。

これまでの中世流通史研究においては、豊田武^①、佐々木銀弥^②、脇田晴子^③各氏などの研究が示すように、当該期の流通は、莊園公領制の展開あるいは崩壊過程において論じられ、地域での流通は中央との流通を支える面のみが強調されがちであった^④。それに対し鈴木敦子氏は、地域での流通を中央との関係においてのみ評価するのではなく、地域における独自の経済発展を考慮し、地域的流通の実態を分析しようとした。氏は、中世後期各地に成立する地域市場に目を向け、当該期における地域経済の構造およびその自立的性格を論じた。こうした視点は、さらにその後の秋山伸隆氏、岸田裕之氏などの研究、あるいは佐々木氏による鈴木氏への反論などにより、流通史にとどまらず、当該期の

大名研究とも密接に関連した形で深められつつある。しかしその一方で、今後の課題となる問題も少なくない。

問題の第一は、地域的流通の特性に関わる問題である。地域的流通は特定の地域内とはいえ、規模あるいは範囲の異なる複数の流通が関連しながら展開している。そうした性格の地域的流通について、その実態を明らかにするためには、地域的流通を形作る個々の流通に対する検討が不可欠である。つまり、流通する物資の性格および各物資の供給先、さらにはそうした流通を担う商人について、諸物資の供給と商人との関わりを流通の実態に即した形で考察する必要があるのではないだろうか。

第二の問題は、地域的流通と権力との関係についてである。この問題については、これまでの研究においても少なからず言及されている。しかしそれらは、地域市場や中継港湾都市など個々の経済拠点を対象としたもので、いわば各経済拠点個別の問題として取り扱われているように思う。しかし地域権力は流通を支配しようとする一方で流通に依存する傾向にある。もとよりこの傾向は、個別の経済拠点や流通ルートのみに限定されるわけではなく、守護領国全域に渡るものである。守護領国と地域的流通との関係は、一経済拠点のみを取りあげ検討するだけではなく、守護領国という政治的な領域と地域的流通の展開範囲という経済的な領域の相互関係について検討することが重要であると考えられる。したがって地域的流通の発展をとりあげる場合にも、守護など地域権力による流通支配の問題を、守護領国全域のような広い範囲で検討する必要があるのではないだろうか。

本稿は、以上のような問題意識にもとづき、地域的流通の発展を守護領国との関わりにおいて考察してみたい。しかしながら史料的には制約も多く、従来の研究のまともに終始するきらいもあるが、先学の成果に導かれつつ論を進めていきたい。

一 地域的流通の重層性

本章では、地域的流通の重層的な性格について検討する。地域的流通の重層的な性格は、一定の地域内において、規模および範囲の異なる複数の流通が同時に展開することに他ならない。しかしながら中世後期においては大名権力による流通支配が徹底されず、個々の物資ごとにそれらが流通する範囲が異なっていたといつても過言ではあるまい。そこで本章では、かかる性格を考える手立てとして、地域的流通をその特徴から、日常生活物資の流通とそれ以外の物資の場合とに分けて検討していく。さらにそれぞれの場合において領主経済についても検討することとする。

在地での日常生活物資の供給をよく示したものとしては、鈴木氏によつて取り上げられた周防国府中宮市があげられる。⁽⁷⁾ 宮市では、合物あるいは炭薪といった日常生活物資が取り扱われていた。またそれらの物資を扱う商人たちは、宮市をその活動の拠点としつとも、周辺市場への販路も有しており、宮市周辺での日常生活物資は宮市の商人によつてもたらされていたといえよう。加えて佐々木氏が指摘したように、⁽⁸⁾ 宮市商人の活動範囲は、陸上部のみならず、海路輸送による海上部への広がりについても予想される。

ところで大内氏への日常生活物資はいかに供給されていたのであろうか。大内氏の日常生活物資の調達については、「大内氏掟書」六九条に次のような条文がある。⁽⁹⁾

一、御肴事、町より進納遅々候て、御事闕候はんする時、贅役より浦へ人を遣たらん時者、浦の問丸の請取状にて、可被遂勘定也、

右の史料は、「諸役人掟書」として、文明一七年（一四八五）に出されたものである。この「掟書」には、右に掲げた肴の他、家具、米錢、細工物、材木など、大内氏へ集中する物資について個々の事務手続きが記されている。各条項から、大内氏は物資ごとに担当奉行を定め、また食料品には「贅役」と呼ばれる役人を置いていたことがわかる。

しかし実際の物資調達はというと、右にも示したように、物資納入が遅れた場合の対応が壁書の条文に規定されるほど、大内氏の物資納入体制は不完全なものであった。かかる事態を招いた原因は、実質的な物資納入を中小商人が行なうのに対し、そうした商人への命令は有力商人を介して行なわれるという大内氏の商人支配方法にあったのである。^⑩さらにその後、中小商人の成長は有力商人による中小商人統括の困難化をまねき、併せて物資納入にも影響を及ぼしたと思われるのであるが、他に大内氏の物資調達に関する史料が見当たらず、物資納入の遅れなどこうした状況への大内氏の対応についての詳細は明らかでない。ただそうした状況のなかで、天文年間にも「諸商人司」が補任されている事実は、^⑪大内氏の商人支配の問題において見逃すことはできない。すなわち、大内氏がその家臣陶氏によって滅ぼされるのが天文二〇年（一五五一）であることから考えても、かかる事実の検出は、大内氏の下では最後まで有力商人が中小商人を統括するという間接的な商人支配が行なわれていたことを意味している。したがってそれに伴う物資納入体制も、右に示した体制が維持されていたものと推測されるのである。

以上のことから、地域における日常生活物資の供給は、市場商人の活動に依存する傾向にあったことがわかる。こうした傾向は大内氏といえども変わりがなく、日常生活物資に関するかぎりは領主経済も地域市場の影響下において展開していたといえよう。

次に、特殊物資の流通について検討する。特殊物資供給の例としてあげられるのは、府中宮市のほぼ対岸に位置

し、宮市の経済的な影響をうけたと思われる下右田遺跡からの出土物であろう。⁽¹²⁾ 下右田遺跡からは、中世期の家屋遺構と共に中国製陶磁器、備前焼の甕、さらには一万三千枚余もの銅銭が出土している。これら物資を供給しえるのは、主には宮市において法会の際に開かれる市であったと推測される。⁽¹³⁾ こうした出土物は、当地域への瀬戸内海流通および海外貿易の影響によってもたらされたことは疑う余地の無いことである。つまり宮市のような地域市場においては、日常生活物資のみではなく、右に見たような特殊な物資も扱われていたこととなる。

ところが大内氏は、特殊物資に関しては地域市場のみには依存していない。

於当町唐錦壺端練くり参十足分御用候、急度被求之、可有上進之由候、於代物者、房顯参上之時、可被渡遣之候、錦者縦半端候共、可有御用候、恐々謹言、

十月廿二日

(弘中)
正長(花押)

御師 棚守左近大夫殿⁽¹⁴⁾

右は、大内氏奉行人によって厳島棚守氏へ絹製品の購入が依頼された文書で、天文年間の発給と思われる。文書中の唐錦・練くり(練繰)はいずれも絹製品で、輸入物資と思われる。この文書で注目されるのは、海外貿易に関与し渡来物資を入手しやすい立場にあった大内氏が、なお厳島で輸入品を購入している点である。大内氏が博多の商人と結び、積極的に海外貿易に関与していたことは周知のことであろう。また大内氏が海外貿易の拠点である博多支配にも積極的な姿勢を見せていることは、⁽¹⁵⁾ 海外貿易を直接掌握しようとする動きとして理解できる。当時の海外貿易は莫大な利益をもたらし、大内氏は海外貿易への関与によって、質量共に相当な物資を得ていたと推測される。しかし右の文書を見るかぎり、大内氏の奢侈品への要求は貿易のみでは満たされていない。しかも先に見たように、地域市場

においてもある程度の特殊物資は供給されていたにもかかわらず、大内氏の必要とする物資は、地域市場のみではその調達が困難であつたのである。つまり本文書において絹製品の購入が指示されている厳島は、大内氏の奢侈品の調達地のひとつとなつていたようで、日常生活物資が大内氏膝下の市場商人によつて納入されていた事実とは明確な差異があるといえる。このことから奢侈品など特殊な物資については、右に見たような形で日常生活物資の流通範囲を越え、より広い範囲での物資調達も行なわれていたといえる。

二 地域的流通と商人

さて、次に問題となるのは、地域内で供給しえない物資が如何にして地域市場にもたらされたのかという点である。換言すれば、幹線ルート上を流通する物資が、どのような過程を経て地域市場やその周辺地域にもたらされたのかである。

長府御祭礼之事

就長府国府一二両宮御神事、被仰出条々

(中略)

一、当町諸商売成敗、可為嚴重事

一、押買狼藉、堅可加制止事

一、号公方買、号守護買、前々儀堅可停止事

中世後期における地域的流通の発達と守護領国

一、對諸国廻船、不可有無理非法之儀事

右事書之旨、若有違背之族者、可加成敗之、隨事体、留置其身、可經上裁之由、所被仰出、壁書如件、

明応四年八月八日^①

(相良) 弥 奉正任

(高川) 大藏 丞 同貞頼

(杉) 左衛門尉 同武明

右の文書は、長門国一宮住吉社及び二宮忌宮社の祭礼への禁制である。文書の内容は、祭礼の進行に関する部分と、祭礼時に開かれる市での治安維持に関する条項からなっているが、右に掲げたのは後者の市の治安維持に関する部分である。この条文のなかで注目されるのは、押買狼藉の禁止など市に対する一般的な治安維持に関する条項に加えて、「對諸国廻船、不可有無理非法之儀」として、諸国から祭礼に集まってくる商売船への違反禁止があげられている点である。このような諸国からの廻船に対する違反禁止に関する他の事例としては、陶氏によつて厳島に出された掟書も確認できることから、この時期大内氏領国における沿岸の地域市場には同様の規定が定められていたであろう。

しからば右の掟書にあるような、地域市場に來訪する諸国廻船にはどのような人々が乗船していたのであろうか。この点については次の二つの場合が想定できる。

諸国廻船と称されるその第一は、地域市場近隣の商人達である。中世後期瀬戸内海沿岸には多くの港灣があつたことが、『兵庫北関入船納帳』^②あるいは『戊子入明記』、『海東諸国記』^③などの史料によつて確認される。これら文献に見える港灣は、中央との交易さらには海外との貿易などに利用された大型船の船籍地で、その分布も大内氏領国内

の沿岸部ほぼ全域にわたっている。また、文明一九年（一四八七）に出された「大内氏掟書」一〇五条には、²²

一、諸商売船公事免許事、雖有望申族、自今以後不可申次之、若於有御免輩者、為上意可被仰出也、仍壁書如件、

と領国内の商売船の公事免許について記されたものもあることから、大内氏領国内の港湾では、大型船ばかりではなく、相当数の商売船が活動していたと推測される。こうした商売船の活動は、佐々木氏が、宮市で活動する薪・炭商人が三田尻津および周辺沿岸各地の製塩地や島嶼をも有力な取引市場とした可能性を指摘されていること²³とも合致する。これらの点から考えて、対象地域と水運との関係は不可分のものであったと考えられる。

諸国廻船として想定される今ひとつの場合は、領国外または領国内であってもやや遠隔地の商船の場合である。禁制で違反禁止の対象とされたのは「諸国廻船」であり、そうした船舶に乗ってやってくる「諸国商人」であった。地域市場へ参集するのは近隣沿岸の商人のみではないのである。

例えば厳島神社には、正平廿一年の年記を持つ燈籠が博多商人によって造立されている。²⁴ また瀬戸内海沿岸の事例ではないが、博多商人神谷寿禎の石見銀山開発の記録「銀山旧記」には、石見銀山開発により数多くの商売船が来訪するようになったことが記されている。²⁵ これらのことは、神谷寿禎など博多商人が広い範囲で活動していたことを示しているといえる。さらに「厳島野坂文書」には、他地域からの商人来訪をより具体的に示したものもある。

当社法会之時、予州衆参詣之处、諸浦警固衆諸事違乱之条、近年一円予州船無着津之間、迷惑之由、以連署之状言上之通、遂披露之处、被成御心得候、向後之儀、聊不可有違乱之由、对警固衆堅固被仰付之条、成奉書候、各可被得其心候、恐々謹言、

五月廿一日

嚴島社家三方中⁽²⁶⁾

(青景)
隆著 (花押)
(龍崎)
隆輔 (花押)

右の史料は、天文一二年（一五四三）発給と思われる大内氏奉行人連署書状である。史料の内容は、嚴島周辺での警固衆の違乱により予州船の来訪が無くなったことについて、嚴島側からの訴えに対して、大内氏側が警固衆への対処を約したものである。これによって嚴島で法会の際に開かれる市には、伊予国からも商人が来訪していたことが分かる。しかしこの事例は、嚴島が幹線ルート上に位置する中継港湾都市的な性格を有することから考えると、地域市場への商人の来訪としての性格は薄いといえる。ただ、既に鈴木氏によって詳述されたように、中世後期嚴島が対岸の廿日市と密接なつながりを持ち、地域市場としての性格を有していたことを考えると、右に示したような他領からの商人が訪れることによって特殊物資が地域へもたらされる可能性も否定はできない。

これまで、瀬戸内海沿岸の地域市場への商人の来訪について述べてきた。しかし地域市場周辺から輸入品とおぼしき陶器が出土すること、あるいは特殊物資の流通という性格を考えると、他国および領国外など、やや遠隔地から来訪する商人が地域への特殊物資供給の鍵を握っていると思われる。そこで次に、そうした特殊物資の流通に関与する商人について、直接的な事例ではないものの、博多宮崎社油神人奥堂氏を例に、都市商人と地域的流通との関わりについて述べておく。

奥堂氏は、博多宮崎社の神人として、油の売買を中心とした活動を行っていた商人である。奥堂氏の活動については、既に豊田武氏⁽²⁸⁾、長沼賢海氏⁽²⁹⁾などによって宮崎油座についての研究のなかで触れられている。それによると、奥堂

氏は旧博多部の奥堂に屋敷・畠を持つ商人であり、宮崎社油座の油神人として座子の成敗権を有していた。³⁰ 近年、この宮崎社油神人奥堂氏の活動について、佐伯弘次氏が海外貿易への関与について指摘されている。³¹ 佐伯氏は、応仁二年（一四六八）の遣明船の記録として著名な『戊子入明記』において、客人衆（客商）として乗り込んだ多くの商人のなかに、澳浜氏・綱庭氏・奥堂氏等の博多商人が確認され、そのなかの奥堂右馬大夫・奥堂五郎次郎なる人物は、先に述べた宮崎社油神人奥堂氏であることを指摘している。佐伯氏によるかかる指摘は、地域的流通の観点からも非常に重要であると考えられる。すなわち、奥堂氏は「御油座文書」が示すように、³² 宮崎社の油神人としてかかる地域の油の進退を独占的に握る一方で、海外貿易にも関与しているのである。いわば奥堂氏は、油を扱う油商人としての性格とは別に、博多を拠点に活動する貿易商人としての面も有していたことになる。つまり、油という日常的な物資を扱う流通と海外からの輸入物資を扱う流通という、規模の異なる複数の流通に関与していたのである。

しからば奥堂氏が油の売買と共に、海外貿易にも関与できた理由はどこに求められるのであろうか。第一に考えられるのは、奥堂氏が博多周辺において有している独自の流通ルートの問題である。奥堂氏が座子の成敗権を持つなど、宮崎社の油神人として博多周辺の油の独占的売買権を有していたことは先に述べた。奥堂氏はそうした諸権利を行使する一方、博多周辺の諸社への油の進納をも請負っていた。

宮崎社・櫛田社・住吉宮御油かいとおされ候時、苅萱関過越事、任先規之旨、不可有其煩候、役人等へ此分堅可申含候、恐々謹言、

永享十年

二月十六日

河内山式部丞

□□（花押）

おくのたう

弥二郎大夫⁽³³⁾

右は、永享十年（一四三八）に出された「河内山式部丞某書状」で、発給者の河内山式部丞某は大内氏の被官と思われる人物である。文書中にある苺萱関は、博多と太宰府の途中にあった関で、これにより奥堂氏が博多の宮崎・櫛田・住吉の三社の油の進納のため、苺萱関の通行を認められていたことが分かる。こうした自由通行の権利は、博多周辺での奥堂氏の油売買に有利に作用すると共に、かかる地域において奥堂氏独自の流通網を形成させたことは容易に想像される。さらに推測が許されるならば、奥堂氏は宮崎社油神人として油の売買によって形成された自らの流通ルートにおいて、日常生活物資としての油だけではなく、他の物資つまり海外貿易に関与することによって得た諸物資をも売買することが可能であつたと考えられるのである。

奥堂氏の海外貿易への関与について考えられる第二点目は、奥堂氏が博多に集中した諸権力と関係を有していたことである。博多は、中世後期における対外貿易の拠点であるばかりでなく、当時の流通の動脈ともいえる瀬戸内海流通ルートの終点でもある⁽³⁴⁾。こうした性格を有する博多には、多くの物資、人、そして諸権力が集中した。博多には、南北朝期以降に限ってみても、少貳氏、渋川氏、宗氏、大内氏、大友氏と博多周辺に関係する諸勢力が伯仲していた。そしてそれら諸権力は軒並海外貿易に関係している。奥堂氏についての具体的活動が知れる「御油座文書」⁽³⁵⁾を見ると、奥堂氏はそうした博多に関係した諸権力から畠諸公事等の免許を与えられているのが分かる。その中でも、大内氏、宗氏との関係は奥堂氏と海外貿易とをつなぐ上において特に有利であつたと考えられる。大内氏の海外貿易との関係が、対明、対朝鮮貿易において絶大であつたことは今更述べるまでもなからう⁽³⁶⁾。また宗氏は特に対朝

鮮貿易と深い關係を有している。⁽³⁷⁾つまり、奥堂氏は、對外貿易に関わる諸權力と關係を持つことにより貿易に關与することが可能であつたのである。

三 流通拠点と大内氏

これまでのところ地域市場および中継港湾都市それぞれについて、各流通拠点が地域的流通の中でどのような経済的役割をしめていたか、そして両者の關係について論じてきた。それにより地域市場、中継港湾都市それぞれが物資の集散機能を有し、地域経済のなかで重要な役割を果たしていたことについて、ある程度は明らかにしたと思う。しかし、地域市場、中継港湾都市の關係についてのより具体的な理解には、地域市場、中継港湾都市など複数を含んだより広い範囲に目を移す必要がある。そこで本章では、対象地域内における流通拠点間のつながりについて検討することにより、対象地域全体の経済構造、あるいはかかる構造に対する大内氏の対応について考えることとする。

地域市場と中継港湾都市との関わりについて次に示す史料は、対象地域全体の流通を考える上においては重要である。

請取申得地村正税米之事

合 四拾石者 百石之内

右六拾石者、於博多津納之申候条、則請取状進之候、相残分四拾石、於富田納之候、重而自寺家四拾石請取状、可差下之候、仍為後日如件、

天文八亥年十二月五日

光瀉（花押）

伊香賀左近將監殿

毛利掃部允殿³⁸

これは、天文八年（一五三八）に東福寺領得地（得地）の年貢徴収を陶氏が請負った際の東福寺僧光瀉の年貢請取状である。これによれば、東福寺領年貢百石の徴収は陶氏によつて請負われ、その内六十石が博多で、残り四十石が陶氏の根拠地である富田において東福寺側に受け渡されたことが分かる。本文書はその内の富田納入分についての請取状である。周防国における東福寺領と大内氏との関係は、享徳三年（一四五四）ごろには陶氏による東福寺領での段銭徴収が確認できる³⁹ほか、本文書の発給される前後頃には、より深いものとなつていた⁴⁰。

ところで周防国における東福寺領年貢は、本来倉敷地である伊佐江津より船積みされ、輸送されていたようである⁴¹。しかし、明応四年（一四九五）の年貢算用状⁴²では、運上年貢の積出が従来積出港である伊佐江津ではなく、陶氏の根拠地である富田付近の福川津に変更されている。こうした年貢輸送の状況については、周防国に同じく所領を持つ東大寺の年貢輸送が参考になる。

周防国における東大寺領の年貢輸送については、既に永村真氏⁴³、本多博之氏の研究があるが、それによれば周防国東大寺領年貢の輸送は、寛正二年（一四六一）には問丸への委託が、文正元年（一四六六）には割符による年貢納入がそれぞれ確認される。こうした背景には、東大寺と周防国現地との連絡の途絶化、内海事情の混乱、周防国現地の年貢換貨の不安定化などが指摘されているが⁴⁵、東福寺領の状況も東大寺の場合と類似した傾向にある。東福寺領の場合、享徳三年（一四五四）には割符による年貢納入が⁴⁶、長祿三年（一四五九）には年貢輸送の兵庫の問丸への委託が

確認できる。⁽⁴⁷⁾ また年貢の徴収も陶氏によって行なわれており、東福寺の現地支配も、東大寺領が大内氏の押領を受け疲弊化していったのと同様、困難な状況にあったといえる。したがって年貢の輸送方法も、より現実的な形で、つまり陶氏あるいは大内氏の意向に添ったものに變化していったのであろう。

そうしたなかにおいて注目されるのは、陶氏によって徴収された年貢が陶氏の拠点富田ばかりではなく、博多においても受け渡しされている点である。富田での年貢受け渡しに関しては、鈴木氏が「年貢請負者の意図にそって新たな流通ルートが形成されたことを示している」⁽⁴⁸⁾、と陶氏による流通拠点形成の過程として位置付けられた。それでは博多での六十石の年貢納入は如何なる理由によるものであろうか。東福寺領への年貢納入は、この時期ほとんどの場合銭貨によってなされている。つまり東福寺領から中央への年貢輸送過程において現物が銭貨に換貨されるのである。⁽⁴⁹⁾ 問丸による輸送請負の場合などは、兵庫において換貨されたようであるが、陶氏など在地勢力により年貢徴収が請負われたような場合は、彼らの根拠地周辺で換貨されたものもあったと思われる。しかし周防国内での換貨は安定したものではなかった。先に見た東大寺の場合でも、年貢の輸送方法転換の理由のひとつに、周防国現地の和市の不安定化があげられており、周防国での年貢米の換貨が満足に行われていないことがうかがえる。東福寺領の場合、年貢米が中央への輸送途上ではなく逆の博多に回送・受け渡しされていることは、博多に運ばれた年貢米が博多で換貨されるためであったことを示しているのではないだろうか。つまり富田では換貨し切れない六十石が博多に回送され、東福寺僧自らの手によって換貨されたものと考えられる。

このことから、この時期の周防国経済は年貢物を換貨するという中央寺社勢力の要求に答えるだけの力を蓄えつつあったということが指摘できる一方、博多への年貢米回送が示すように、地域市場のみではその要求全てに答えるだ

けの経済的能力は持ち得ず、博多という幹線ルート上の都市に補完される構造を呈していたといえる。

最後に、対象地域内の経済拠点間の関係について、大内氏領国における芸能民の活動を通じて、今少しの検討を加えておきたい。

渋屋大夫上洛候、於当社法衆可仕之由申候、諸事可有入魂之由、從東向殿様可申之旨候、恐々謹言、

五月廿五日

(龍崎)
隆輔(花押)

棚守左近衛將監殿^⑤

右は、手猿楽師渋谷大夫一行が九州からの上洛の際、厳島への寄島を求めたことについて、大内氏の奉行人である龍崎隆輔が棚守氏へ配慮を依頼した文書で、天文年間のもので考えられる史料である。こうした芸能民の厳島への来島自体、あるいは文書中において「於当社法衆可仕之由申候」と渋谷大夫自身が厳島への寄島を希望していることは、当時の幹線ルート上における厳島の地位をうかがわせるものとして注目できる。渋谷大夫一行は、この時期ならば九州への興行のため下向しているが、本文書も渋谷大夫のそのような行動の一環として位置付けられるものである。^⑥

さらに厳島文書の中には、本文書と類似した内容で、摂津国傀儡子の厳島寄島および興行を幹旋紹介した文書もみられる。

摂津国傀儡子^(マコ)九州令一見、只今帰国候、貴嶋へも可参之由申候間、啓一札候、猶々茂彼能御見物有度候者、旁々被仰談、能之儀可被仰付候、於爰許雖能仕度由申、去夏被仰出仕候条、不能兎角候、委曲此者より可申候、此由可御意得候、恐々謹言、

九月廿七日

(江良)
房栄(花押)

野坂左近衛將監殿御宿所⁽⁸³⁾

右は、摂津の傀儡子が九州から帰国の際、厳島寄島を求めたことについて、陶氏の重臣である江良房栄が厳島棚守氏に対し、その寄島および興行を紹介斡旋した文書で、これもまた天文年間のものと考えられる。厳島文書には本文書の他にも、上洛途中の唐人が厳島へ寄島することが、大内氏奉行人によって報告されているものもある⁽⁸⁴⁾。これらのことは、この時期厳島には多くの芸能者が来島していたことを示しているのであるが、さらに注意せねばならないのは、右の文書をはじめ、厳島文書中の芸能民の厳島来島に関する文書はいずれも、芸能民の行動予定は大内氏側によってつかまれ、それが厳島側に報告された内容になっていることである。こうした事実は、文書発給者である大内氏が彼ら芸能民の行動を把握していることと併せて、文書発給時においては領国内にいる芸能民と大内氏方の者とが何らかの連絡を有していることを示している。

右の理解が妥当であるならば、応仁文明の乱以降芸能民の地方への興行は、その多くが大名など地方の有力者を頼ったもので、興行に際しては紹介状を持参する場合が多かったことを考慮せねばならない⁽⁸⁵⁾。例えば右にあげた渋谷大夫について見ると、渋谷大夫は天文一三年(一五四四)豊後下向に際して、山科言繼に豊後国守護大友氏への紹介状を依頼しているのが確認される⁽⁸⁶⁾。右にあげた芸能民達も、そうした有力者の下を渡り歩いていたのであろう。地方の有力者を頼る彼らにとっては、当地域一帯に権力を有する大内氏の領国は重要な活動場所であったのであり、厳島など多くの人が集まる場所は重要な興行地であったと思われる。つまり右にあげた例は、九州での巡行を終えた一行

が、博多ないしは山口到着の後大内氏側と連絡を取り、その後の巡行先への紹介状を得たものと考えられる。その際大内氏側は、自らの領国内において彼らの活動可能な場所への紹介を与えたと考えられるのである。こうしたことから考えると、彼ら芸能民たちの活動も、大内氏領国内で多くの人が集まる博多・山口・厳島などを結んだものとなつたのであろう。つまりかかる三箇所を結ぶラインは半ばルート化していたと考えても差し支えあるまい。したがって大内氏領国内の博多、厳島などの流通拠点は、瀬戸内海幹線ルート上の一経済拠点としてだけでなく、大内氏の支配によつて領国内の他の経済拠点と結び付けられ密接な関係を有していたといえるのではないだろうか。

おわりに

以上、中世後期の地域的流通の構造について、かかる流通を形成する個別の流通と、その流通を担う商人との関係、そして地域的流通と大内氏との関係について述べてきた。それらをまとめるならば次のようになる。中世後期瀬戸内海西部地域では、地域市場や中継港湾都市といった流通拠点を中心に地域的流通が展開し、流通拠点においては、日常生活物資のみならず奢侈品など特殊な物資も交易されていた。しかし地域市場はそれ自体の物資供給能力のみでは日常生活物資以外の供給は困難であり、複数の流通が結節する中継港湾都市に補完されることによりはじめて流通拠点としての機能を保持しえたのであった。そうした地域市場と中継港湾都市は、地域市場周辺の商人、中継港湾都市を拠点に活動する商人などによつて結節されていた。その中でも中継港湾都市を拠点に活動する商人は、自らも複数の流通に関与し流通の媒介的な役割を果たしていた。また大内氏などは地域的流通に依存する一方で特定の商人

に特権を与え、領国内の流通拠点結び付け流通ルートの把握を図った。そしてそれらの総体として描かれる地域流通構造の実態は、地域への物資流入の窓口である中継港湾都市のもとにいくつかの地域市場が連関する構造であったといえよう。またこうした構造を有する地域的流通は、経済的な発展にともない、新たに中央との流通を支える側面も有し始めるのである。

上記が本稿で明らかにした点であるが、反省点も多く今後の課題とせざるをえない点もある。最後にそうした点を展望的に述べて本稿のまとめとしたい。

まずあげておかなければならないのは、流通を担う商人に対する個別分析の深化である。本稿では複数の流通に関する商人として、博多笠崎社油神人奥堂氏をとりあげた。これまでの研究においても、地域市場の商人を中心に、地域的流通と商人との関係について論じられてはいるが、それによって地域的流通を担う商人像が明らかになったとはいえない。地域的流通には、日常生活に密着した規模的には極めて小規模な流通も含まれる一方、海外からの物資が扱われるような大規模なものもある。そうした多様な流通を担った商人の多様な行動について、未だ十分な理解が得られていないようにも思える。地域的流通のより具体的理解のためには、彼ら商人の綿密な分析が必要となるのではないだろうか。

今ひとつ述べておかなばならないのは、対象地域の問題である。本稿ではその対象を大内氏領国としたものの、実際の検討は瀬戸内海沿岸の主要な流通拠点に限られてしまった。これは大内氏領国において博多・厳島といった中継港湾都市がかかる地域での流通の上で重要な位置を占めており、当該期の流通が水運と不可分の関係にあったことによるものである。しかし内陸部に経済拠点が全く存在しなかったわけではなく、特に山口の存在は大きいと思われる。

る。地域の流通の発達を中世後期の地方分権化の一側面と理解し、当該期の地域的特質の解明がその目的であるならば、政治的な拠点としての山口と各流通拠点との関係についても考察していくことが必要であろう。

注

- (1) 豊田武『中世日本商業史の研究』（一九四四年、岩波書店）、『日本商人史—中世編—』（一九四九年、東京堂）、『日本の封建都市』（一九五二年、岩波書店）などが上げられる。尚、これらはすべて『豊田武著作集』（一九八二年、吉川弘文館）に所収。
- (2) 佐々木銀弥『中世の商業』（一九六一年、至文堂）、『荘園の商業』（一九六五年、吉川弘文館）、『日本中世商品流通史の研究』（一九七二年、法政大学出版局）。
- (3) 脇田晴子『日本中世商業発達史の研究』（一九六九年、御茶ノ水書房）、『室町期の経済発展』（『岩波講座日本歴史』7巻〈中世3〉、一九七六年、岩波書店）、『日本中世都市論』（一九八一年、東京大学出版会）。
- (4) 例えば、松岡久人『中世後期内海水運の性格』（『福尾猛市郎編『内海産業と水運の史的研究』一九六六年、吉川弘文館』）は内海水運の問題を取り扱ったもので、本稿にも多くの示唆を与える。しかし視点的には、主として中央と地方との関係を論じたものである。
- (5) 鈴木敦子『中世後期における地域経済圏の構造』（『世界史における地域と民衆（続）』一九八〇年歴史学研究会大会報告）。
- (6) 鈴木敦子『地域市場としての厳島門前町と流通支配』（『富士大学研究記要』一六—二号、一九八三年）、秋山伸隆『戦国大名毛利氏の流通支配の性格』（渡辺則文編『産業の発達と地域社会』一九八二年、溪水社、その後戦国大名論集6『中国大名の研究』、一九八四年、吉川弘文館に収録）、岸田裕之『中世後期の地方経済と都市』（歴史学研究会日本史研究会共編『講座日本歴史4』中世2、一九八五年東京大学出版会）所収、佐々木銀弥『中世後期地域経済の形成と流通』（永原慶二、佐々木潤之介編『日本中世史研究の軌跡』一九八八年、東京大学出版会）所収。
- (7) 鈴木敦子前掲注5論文参照。

- (8) 佐々木銀弥前掲注6論文参照。
- (9) 佐藤進一編『中世法制史料集』第三卷武家家法1、六二頁。以下「大内氏掟書」からの出典は、条文番号と『中世法制史料集』の頁数のみを記す。
- (10) 大内氏による商人支配は、宮市の場合相物商人である兄部氏に他の相物商人を総括させ、中小商人に物資の納入をさせている。尚、この点の詳細については鈴木敦子前掲注5論文参照。
- (11) 年月日未詳「江良房栄書状」、「厳島野坂文書」六五号（『広島県史』古代中世史料編Ⅱ、四五頁、一九七六年）。以下、「広島県史」よりの引用は「県史」と略し、所収文書名、史料編の巻数、頁数のみを記す。
- (12) 『下右田遺跡第4次調査報告概報』（山口県教育委員会編、一九八〇年）
- (13) 明応五年（一四九六）「十月会町禁制」（『大内氏掟書』一五七条、『中世法制史料集』一〇〇頁）。
- (14) 「厳島野坂文書」一七六号（『県史』史料編Ⅱ、一一九頁）。
- (15) 大内氏の博多支配については、佐伯弘次「中世後期の博多と大内氏」『史淵』一二二輯、一九八五年）、同「中世都市博多の発展と息浜」（川添昭二先生還暦記念会編『日本中世論攷』、一九八七年、文献出版）を参照。
- (16) 『大乘院寺社雑事記』明応五年四月廿八日条は、「唐船三艘当年可帰朝成、和泉堺地下人一万貫雑物積之、三倍四倍二可成之間、三艘ハ数万貫足也」と、当時の海外貿易が莫大の利益をもたらす事を記している。また、大内氏が海外貿易によって得た奢侈品を幕府関係者や公家へ贈っていることは周知のことであるが、「親元日記」文明十年七月廿五日条において、「唐物御荷数十五組」が「大内氏より送進色々、若洲小濱津より京着」で送られることは、大内氏が中央との物資輸送に、既成の瀬戸内海ルートではなく、日本海に独自の輸送ルートを有していたことを想像させる。
- (17) 「長門国府一二宮神事条々」（『大内氏掟書』一四八条、『中世法制史料集』九七頁）。
- (18) 「陶晴賢厳島掟書写」（『大願寺文書』六五号、『県史』史料編Ⅲ、一二二頁）。
- (19) 「兵庫北関入船納帳」（燈心文庫編、一九八一年、中央公論美術出版）によれば、周防では大畠、上関、富田、野上、楊井、長門では下関、豊前では門司に船籍を有する船舶の活動が確認できる。
- (20) 『戊子入明記』（『統史籍集覧』第一冊、一九三〇年、近藤出版）によれば、門司、富田、上関、深溝、楊井の船籍を有する貿易船が確認できる。

- (21) 『海東諸国記』（朝鮮史編修会編『朝鮮史料叢書』第二）によると、周防では大島、上関、富田、長門では赤間関、門司など、筑前では宮崎津などの港湾名が確認できる。尚、この『海東諸国記』にあらわれる商人については、有光友学「中世後期における貿易商人の動向」（『静岡大学人文学部論叢』二二号、一九七〇年）が詳しい。
- (22) 『諸商売船公事免許事』（大内氏掟書）一〇五条『中世法制史料集』七五頁。
- (23) 佐々木銀弥前掲注6論文参照。
- (24) 『大日本史料』六編二十七、六七二頁。
- (25) 『山口県史料』中世編上（山口県文書館編、一九七九年）所収。
- (26) 『嚴島野坂文書』四〇号（『県史』史料編II、二七頁）。
- (27) 鈴木敦子前掲注5注6論文参照。
- (28) 豊田武「戦国期地方の座」（豊田武著作集『座の研究』一九八四年、所収）。
- (29) 長沼賢海「油座の一・二について」（『九州文化史研究所紀要』八・九合併号、後『日本海事史研究』一九七六年、九州大学出版会に所収）。
- (30) 豊田武前掲注28論文参照。
- (31) 佐伯弘次前掲注15論文参照。
- (32) 『御油座文書写』（川添昭二「史料紹介福岡市宮崎八幡宮所蔵『御油座文書』、『宮崎神宮文書』、『石燈籠銘文』」、「九州史学』七号、一九五七年、所収）以下、『御油座文書写』からの引用は、文書番号のみを記す。
- (33) 『御油座文書写』一六号。
- (34) 田中健男「日鮮貿易における博多商人の活動」（『中世海外交渉史の研究』一九五九年、東京大学出版会）。
- (35) 『御油座文書写』によると、奥堂氏は、小次氏、宗氏本家、仁位中村系宗氏、大内氏歴代当主、大友宗麟から公事の免許を与えられている。
- (36) 大内氏と海外貿易との関係については、田中健男前掲注34論文のほか、同『中世対外関係史』（一九七五年、東京大学出版会）、田村洋幸『中世日朝貿易の研究』（一九六七年、三和書房）を参照されたい。
- (37) 宗氏の対外貿易に果たした役割については、田中健男前掲注34論文、長節子『中世日朝関係と対馬』（一九八七年、吉

川弘文館)が詳しい。

(38) 『東福寺文書』四六三号。

(39) 『東福寺文書』四四三号。

(40) 周防国の東福寺領と大内氏との関係は、『東福寺文書』四四八号などで、東福寺側が山口へ歳暮・年始の礼を送っていることから推測される。更に両者の関係を示すものとして、『東福寺文書』四五七号、および四五八号の周防国庄主職補任に関する「護景書状」は注目される。両文書の発給者である護景なる人物は、姓を欠くため詳細は不明なものの、文明十四年(一四八二)宮市商人兄部氏に対して合物の納入催促が行われた文書(「兄部文書」七号)の発給者と同一人物であると思われる。このことは、大内氏および陶氏と東福寺との関係が、陶氏によって東福寺領の年貢が請負われただけでなく、大内氏も現地の庄主職補任にまで関与していたことを示している。

(41) 『東福寺文書』四三二号では、「倉敷伊佐江津」とある。

(42) 『東福寺文書』四四九号。

(43) 永村真「油倉の組織と諸活動」(『中世東大寺の組織と経営』一九八八年、塙書房)所収。

(44) 本多博之「中世後期東大寺の周防国衙領支配の展開」(『日本史研究』二九六号、一九八七年)。

(45) 本多博之前掲注44論文参照。

(46) 『東福寺文書』四四三号。

(47) 『東福寺文書』四五五号。

(48) 鈴木敦子前掲注5論文。

(49) 例えば、『東福寺文書』四五一号「東福寺領周防得地保三作公文分年貢算用状案」によると、明応九年の得地保三作公文分の年貢は、一五石が兵庫に回送され、必要経費を除いた上で売却、拾五貫四百文余を得ている。

(50) 本多博之前掲注44論文参照。

(51) 『嚴島野坂文書』一〇五号(『県史』史料編Ⅱ、七〇頁)。

(52) 渋谷大夫の活動については、堀口康生『猿樂能の研究』(一九八八年、桜楓社)を参照。

(53) 『嚴島野坂文書』六七号(『県史』史料編Ⅱ、四六頁)。

(54) 「厳島野坂文書」七〇号（『県史』史料編Ⅱ、四七頁）。

(55) 芸能民の地方巡行については、川嶋将生・山路興造「地方と文芸」（芸能史研究会編『日本芸能史』三卷、一九八三年、法政大学出版局）参照。

(56) 『言繼卿記』天文十三年十一月二十四日条。

(57) 内海部と内陸部の流通について、岸田裕之氏が「国人領主と財政支—戦国時代の雲芸攻防における山間地域領主主層の性格—」（『芸備地方史研究』一五七号、一九八六年）を発表された。こうした視点は、山口と厳島・博多などの関係にも重要であると考ええる。